

CJK2016に参加して

九大院工 石松亮一

初めに

CJK2016 が、2016 年 8 月 24 日から 27 日まで中国の武夷山で開催された。私にとって、日本、中国、韓国の分析化学の現状を知る良い機会であったし、未踏の地であった中国を訪れてみたいとの思いから、参加を決意した。最近、中国国内における食の安全性や、環境問題、反日運動の影響で、中国の人気は決して高くなく、筆者もこれらを理由に参加を思いとどまることもあったが、橘玲氏による「橘玲の中国私論」（ダイヤモンド社、2015 年）を読んだことによって中国に対して興味がわき、これが参加を後押しした。よって、中国を知ることも参加の目的の一つとなった。

私にとって CJK は、2011 年の済州島で開催された会議に参加してから 5 年の時間がたったが、日本からの参加者である、内山先生（首都大）、前田先生（理研）、早川先生（金沢大）、保母先生（元東京都立大）後藤先生（元東亜 DKK）、伊藤先生（近畿大）、大栗先生（日本分析工業（株））、加藤先生（産総研）、佐藤先生（長崎国際大）らは、私の参加を歓迎してくれた。特に、佐藤先生には、福岡空港から旅程が同じで、色々なことにアドナイスを頂いた。この場を借りて御礼を申し上げたい。

上海にて

武征山は世界遺産に登録されているが、交通アクセスは良いとは言えず、福岡空港から上海経由で武征山に向かったが、上海に一泊しなければならなかった。ちょうどよい機会であったので、上海の街中を少し歩いてみることにした。まず、上海国際空港から地下鉄でホテルがある上海中心部へ向かった。1 時間ほどの時間を要し、車内は混雑していたが、比較的快適であった。車内で少年が観光のチラシを配っていたのは日本では見慣れない光景であった。運賃は 7 円で、当時の為替レート（1 元～15.5 円）から計算すると、110 円程度である。地下鉄は、料金が安く、渋滞に巻き込まれないので、便利であるが、切符を買う時に混雑し、さらに改札前でのセキュリティチェックで混雑するのがややデメリットであった。駅改札の前に所持する荷物を X 線か何かで中身をチェックされる。テロなどの犯罪を未然に防げる可能性が増えるので、良いことではあるが、間近に迫った脅威でもあるのだろうか。

市内（南京東路駅から人民広場駅近くにかけて）は大変な賑わいで、外国人を含めた多くの人が上海を楽しんでいるように見えた。大通りに面した建物は近代的で、外国資本や日本資本の百貨店やレストラン、アパレルショップが



上海の南京東路駅の近くの様子。非常に多くの人であふれかえっていた。

立ち並び、非常に発展していると感じた。しかし、一步路地に入ると、個人が経営する果物屋や商店、小料理屋が目立ち、こちらの方が、むしろ想像していた中国であり、興味深く感じた。上海はここ 10 年程度で大きく発展してきたらしいが、さらなる発展の可能性を秘めていると思う。大通りからやや離れたところで見つけた肉まんの売店と、牛辛麺を提供している大衆食堂が個人的に気に入った。肉まんは、小ぶりながらも、一個 1.5 元（約 24 円）と格安で、おいしかった。日本では使われないような香辛料が使われていたのが新鮮であった。牛辛麺は一杯 20 元（約 300 円）で、結構辛く、スープがおいしかった。麺は福岡のラーメンに使用されている細麺と味と食感がほぼ同じで、食べられた味であった。ただ、薬味として使われているパクチーは苦手であったけれど。

武征山についてから

上海空港（国内線）から 1 時間ほどで武夷山空港に着く。朝 8 時半ころ上海中心部をホテルから駅まで歩いたが、大型デパートの前で、太極拳の演武や、バドミントンに興じている中国人を多数見かけ、「公の場でも人の目を気にしないのだな」と実感する。空路は、中国東方航空を利用したが、利用する機体のトラブルが発生し、1 時間ほど待たされた上、搭乗口が変更になりさらに 2 時間近く待たされるも、無事出発して武夷山空港に到着した。車で 20 分ほどかけて CJK の会場に到着し、参加登録を済ませた。日本の夏は高温多湿で、過ごしやすいは決して言えないが、石垣島と同じくらいの緯度にある武夷山近辺も気温が高く、特

に湿度が高かった。高い湿度の一因は、夕立である。会議中、毎日のように夕立があり、一度は滝のような雨が15分ほど降っていた。もちろん会場は空調が効いていて、非常に快適であった。

到着の次の日の朝、開会式が行われた。CJK 運営委員の先生から開会の挨拶があり、その後、実行委員長や、韓国代表、日本代表（内山先生）の先生方から挨拶があった。特に、内山先生から、今回の CJK は東京理科大で開催される予定であるというアナウンスがあった。その後基調講演、招待講演が続いた。どの発表も大変興味深く、非常に勉強になる発表であった。個人的にもっとも興味を惹かれたのが、Chen Xi（□曦）教授の発表であった。教授らは、疎水性あるいは親水性官能基を修飾したグラフェンがベースとなった数 mm 程度の両親媒性材料を開発した (*Angew. Chem. Int. Ed.*, **2016**, *55*, 3936)。グラフェンとフィチン酸を水熱処理すると 3 次元のグラフェンフォームができる。これは油と水を瞬時に吸着、保持する能力を持っているので、水に浮遊する油（逆も可）の効率的回収にも応用できる可能性があるし、材料内部のナノ空間を分析化学に応用できる可能性もあるだろう。筆者の行っている発光にも応用できる可能性があるので、帰国後、関連論文を調べて、実際に検討してみた。

ポスター発表では、徳島大学の田中秀治先生の元で研究をしている博士課程の大塚君が賞を獲得した。彼の発表は、物理化学を基盤とした速度論解析によるものであり、非常にしっかりしたものであった。おそらく、この点が評価され、受賞に至ったのではないかと思う。大変喜ばしいことである。

会議の中日に、島津中国が主催する懇親会が開催された。懇親会の初め、正装した女性が二人、ステージの上で、中国茶の煎れ方を優雅に披露していた。後で知ったのだが、武夷山のいたるところで茶葉が栽培され、岩茶は特産物の一つであった。煎れ方も、最初に煎じたものは捨て、2 番煎じから飲むというスタイルであった。1 番煎じは味も香りも濃すぎるのだろうか。ホテルの部屋に茶葉がおいてあったので、次の日に同じようにお茶を煎れてみた。確かに最初の煎れお茶は苦みと渋みが強かったが、2 回目以降はちょうどよかった。お茶の煎れ方一つにも単純に感心してしまった。さて、懇親会の料理だが、全般的においしい中華料理であったが、水蛙の足が入ったスープには驚いた。生々しくも、蛙の足には皮がついており、食べるのをかなり戸惑ったが、食べたことがなかったので、いい機会と思って口に運んでみると、臭みなどは全くなく、触感や味は鶏肉とほとんど同じであったし、皮は、魚の皮と同じようであった。肉もスープも非常においしかった。その他の機会に、スッポンスープと鶏の足先の甘酢煮を食したが、見た目は良くないが、これらもおいしかった。CJK に参加す



滞在したホテルの庭園とそこから見える武夷山の一部

ることで、食べたことのない食材 3 種類を経験できたこともよかった。懇親会後は近隣の茶葉工場の見学に連れて行ってもらい、武夷山でのお茶の歴史や、茶葉の乾燥や発酵といった過程の見学をさせてもらった。巨大な工場並びに見学施設で、圧巻であった。見学後、工場で生産されたお茶の試飲があり、一息ついてほっとした。

最終日の閉会式の後に、出発まで時間があったので、佐藤先生がオーガナイザーの□曦教授に頼んで、簡単な観光を手配してもらうことになった。佐藤先生に無理を行って、私も加えてもらった。佐藤先生、佐藤研の助手の臼井さん、伊藤先生、大栗さん、私の 5 名だったので、タクシーを 2 台迎えに来てくれるようにホテルに頼むと、1 台だけやってきた。その運転手は、やや離れた所にもう一台待機しているので、とりあえずそこまで連れていくと言う。このあたりの交渉は大栗さんが中国語で行い（後に、中国出張をしているうちに覚えたということを知って驚いた）、我々は大変助かった。待機しているはずの場所に行くと、ハーフパンツをはいた若者がやってきて（タクシーの運転手にはとても見えなかった）、タクシーの運転手は、若者が乗り込んだその車（一般車）に乗れと促す。仕方なく、伊藤先生と私がその車に分乗して、出発した。若者が運転する車は AT 車であったが、若者が行うギアチェンジや車線変更、駐車はごちなく、明らかに運転に慣れていなかった。それでも車はどんどんと人気のない山の方へ進んでいった。我々としては市内で、買い物でもと考えていたので、不安は募っていった。その後どんどんと山の上に行くと、さびれた町に連れていかれた。町の入り口には受付があり、タクシーの運転手に一人 70 元程度（約 1100 円）の入場チケット（ガイド付き）の購入を促される。さびれた町に見学する場所も見当たらず、不安と猜疑心が高まり、これは騙されている、ぼったくりだという疑念を払しょくできずに、チケットの購入を渋っていると、佐藤先生が全員分のチケットを一括購入し、「じゃあ行きましょう」とおっしゃる。私は「特に見るところもなさそうなので、これは騙さ

れているのではないのでしょうか」という旨を言っても、一行はガイドについて移動していくので、私もそのままついていくと、眼前に門が現れ、その先に非常に古い集落が見えた。門をくぐって集落に入ると、小川の脇に古い民家が立ち並び、小川に沿って洗濯物が干されたり、住民が麻雀をしたり、軒先で老婆が茶葉を選りすぐっていたり、鍛冶屋が熱した鉄（おそらく農具）を打っていたりと、生活感の漂う、趣のある光景が広がっていた。どうやら数百年前に栄えていた街らしい。門をくぐると、椅子に腰かけた中年男性が立ち上がり、こちらに対して何かを言ってきた。どうやらチケットを見せろということらしい。ここで私は初めてチケットの必要性を認識し、疑念もなくなったが、先ほどの発言もあり、ややばつの悪い思いをした。その後、ガイドにその地区にある寺院などを案内してもらったが、非常に入り組んでいて、ガイドがいないとわからないような地形であり、ガイドも必要であった。後でわかったことだが、武夷山の近隣地区には、宗時代の朱子学の開祖である朱熹も住んでいたことがあり、宗朝以降も、お茶の交易で栄えていたようだ。今回案内された場所は、下梅古村という名らしく、居住区は清代に建てられており、非常に古い街並みを残している。今もお茶が特産らしく、超高級岩茶（一缶数十万円！）も販売しており、観光客であふれていた。

帰りの際に、タクシーの運転手の中年男性と若者を比べると、よく似ているのがわかった。おそらく、中年男性のタクシー運転手は自分の息子に、小遣い稼ぎのため急遽タクシー運転手としたてあげたのではなかろうか。若者は21歳といていたが、もっと幼く見えた。観光を終えて、この古村を去る時に、大栗さんは自分のカメラが無いことに気づき、観光途中の、小さなヒョウタンの飾り物を購入する時にカメラを置き忘れたことを思い出すと、得意の中国語でガイドに事情を説明して、無事カメラを回収することができた。これにも、さすがと感心してしまった。

若者の運転はざこちないものの、その後、無事にホテルに到着し、二台分のタクシー代金は大栗さんがいつの間にか支払っていた。（ありがとうございます。）このような観光の機会を与えてくれた口囃教授と、ともに同行させていただいた方々に感謝したい（さっとチケットを買ってくださった佐藤先生、ありがとうございます）。

武夷山を出発してから

武夷山を出発して上海経由で福岡空港に向かったが、ここでも乗り継ぎが悪く、上海に一泊せざるを得なかった。武夷山から上海に向かう便のなかで、統計に関する入門書（日本語）を読んでいると、たまたま隣に座った中国人が話しかけてきた。その人は60歳の中国人数学者で、上海の大学で教鞭をとっている教授だという。関西や九州大学に



下梅古村の景観。武夷山市内から東に6 kmほど離れたところに位置する。



下梅古村にて、お茶を選りすぐっている作業を興味深そうに見つめる大栗さん。

も来たことがあり、片言の日本語を話していた。最初は、「その統計の本のタイトルは何かおかしいね」と始まり、なんでおかしいかと聞いてみると、いろいろと理由を教えてくださいました。この教授の専門の一つは統計学であった。夏休みを利用した武夷山までの観光の帰りであり、奥さんと一緒だった。来年の夏休みには日本に行く予定であるという。それほど話は弾まなかったが、この教授は上海生まれの上海育ちで、ここ10年くらいの間に上海は急速な発展を遂げたことを教えてくれた。上海で辛くておいしい料理を提供するおすすめの店はどこにあるかと聞いたら、うーんとうなっていて、横にいる奥さんに尋ねて、結果、人民公園駅の近くにたくさんあるんじゃないかなとおおざっぱに教えてくれた。統計の本のタイトルには手厳しいが、食べ物屋はそ

れほど興味がないらしい。いかにも学者らしい。あるいは、この教授が把握するのを諦めるくらい上海は急速に発展したのかもしれない。

上海のホテルに到着したのが 21 時過ぎであり、往路で上海に一泊したときに見つけたお気に入りの辛麺屋で、牛肉麺を食べ、就寝。翌日、例の肉まんなどを食べ、地下鉄を利用して、国際空港に向かった。福岡に向かう飛行機の機内で、その統計の本を読んでいると、今度は隣の席の、3 歳くらいの男の子を連れた日本語が非常に達者な中国人女性が話しかけてきた。彼女は最初中国語で話しかけてきたが、筆者が「わからない」というリアクションをすると、今度は日本語で、「難しそうな本を読んでいますね」と言った。話を聞くと彼女は私と同年代で、数年前に日本人男性と結婚し、福岡に住んでいるという。一人息子と 1 か月ほど里帰りをした帰りとのことだった。彼女は、特に、子どもに対する教育方針の日本と中国の違いが国際結婚で大変だと言っていた。子どもが夜中に家の中で騒いでいると、義親に「騒がないでね」と言われたり、外出しているときも「外では静かにしようね」と言われるのがあまり好きではないらしい。時と場所を選ばず、子供は元気よくあるべきだと言っていた。中国では、他人の行動に寛容なので、そんなことは言わないらしい。そういえば、筆者は今回の旅行中、上海の食料雑貨店で、トランク一枚と靴下と靴だけ履いた、買い物中の恰幅の良いおじさんを見てびっくりしたが、そのことをこの女性に話しても、そういうことはよくあるし、特段に変だとは思わないと言っていた。中国は異常に人口が多く、日本で強く働く「同調圧力」が少ないのだろう。上海の地下鉄車両内では、レストランでは大声を出さないようにしましょうとか、エチケットやマナーに気を付けましょうという映像が流れていたのだから、中国政府も、外

国人からの印象を良くしようとしているのだろう。しかし、人口が減少しない限り、この「他人に寛容」という考え方が変わるのにはさらに先になるかもしれない。彼女は中国の文化などいろいろ話してくれて、大変興味深かった。中国のお茶を日本で煎れると、日本の水と中国の水は硬度がちがうので、味が違うから、お土産としてはあまりよくないとも言っていた。お土産としては調味料や香辛料がお薦めらしいというのは納得した。また、中国語の発音も教えてもらった。X から始まる単語や人名 (xu や xi など) の発音がわからなかったのだから、sh とほとんど同じらしい。日本と中国を行き来している彼女は、両国の特徴をよく知っており、彼女の話は中国の文化や中国人の考え方を知る上で大変ためになった。

終わりに

今回、CJK に参加することで、中国と韓国の分析化学の高いレベルや中国人の考え方を知ることができて大変有益であった。(今回の記事の中に、韓国に関する話題は無かったが、中国国内で開催されたシンポジウムであるので、圧倒的に中国からの参加者が多く、話題が中国に集中してしまった。) 日本の 10 倍以上の人口と、広大な国土を持つ中国は高い潜在能力をもっており、近隣国の日本は否応なく、中国と付き合っていかなければならない。日本よりさらに厳しい競争社会を生き抜いてきた非常に賢い中国人研究者と競争しなければいけないと考えると憂鬱になってくるが、筆者もどうにか研究者として生き残りたいと思う今日この頃である。

最後に、この記事で使用した写真の一部は佐藤先生と佐藤研究室の臼井さんに提供していただいた。この場を借りて感謝の意を述べたい。